



*Twitter
Novels*

*201010
haluhill*

気象庁の発表によると、来春の花粉は今年の100倍飛散する見込みとのこと。再来年の花粉は、今年の1000倍飛ぶらしい。3年後には日本中が植物と花粉に包み込まれるらしい。「花粉はアレルギー源ではなく、受精のための戦略です」と気象庁が発表したとかしないとか。

中国もしくは北朝鮮からサイバーテロがありました。日本中のiPadが、おっぱいマウスパッドに変わりました。どうやってiPadを人気アイドルや人気アニメキャラのおっぱいマウスパッドに変えたのかは、不明です。テロの目的も不明ですが、逆に喜んでる人もいるとの事です。

中国もしくは北朝鮮から再びサイバーテロが発生しました。今度は日本中のマウスパッドがおっぱいマウスパッドに変形する現象が発生。これはサイバーテロなのか。ただのパッドすり替えじゃないのか。テロの手段として爆撃でなく、おっぱいマウスパッドが使われている理由は謎です。

「たばこの値段があがったから禁煙することにしたよ。有害物質を空気中に出さなくなるから、子どもにもいいでしょ」運転席の夫が言う。たばこの煙はなくなっても、今乗っている自動車が、たばこの何倍もの有害物質を排気ガスとして、街中に撒き散らしている。助手席に座る私も同罪だ。

「耳かきメイド殺人事件の裁判員裁判、検察側が死刑求刑。裁判員の意思決定は重いなこれ」「人間に合法的に死を与えることができるのは、国家だけである。国家は死刑と戦争によって、人を合法的に殺すことができる」

合法的に殺人していいものかどうか、迷っている地球人も多いけれど、牛とか鳥とか豚とか野菜とかは、合法的にばんばん殺されている。人間が生きるために、必要以上に動植物が殺されているわけだけど、私たちが生きるために、他人を合法的に殺す必要って、あるんだろうか。

昨日から寒さが増した。今日は雨も降ったせいか、風邪気味の人も多い。地下鉄駅前からの帰り道、いつも見かけるホームレスの人たちも、寒そうに体を丸めていた。会社から帰宅する人々は、みな無言で通り過ぎる。僕もその1人。寒そうだけれど、ごめんなさい。みんなで社会を変えます。

横断歩道を渡ろうとした。向こうから歩いてくる人とぶつかった。僕だけでない、歩行者全員が正面衝突している。体が重なる。唇も重なる。手を重ねあう。指をからませあう。信号機のメロディが響く。道路に横たわるうち、向こうから歩いてくる人とぶつからない方が、奇妙に思えてきた。

僕がたまにタクシーを使おうとすると、いつも同じ会社の車が停まる。乗ってみると、運転席には毎回同じ白人のドライバーが座っている。僕が望む行き先は、毎回同じ、僕の家だ。タクシーはいつも途中で人身事故を起こす。僕も警察で事情聴取を受ける。運転手は代わらない。何故だろう。

道端にスーツを着た女性が倒れている。彼女の背中にはナイフが刺さっており、血も出ているが、みんな知らんぷりをして、足早に通り過ぎる。朝だから忙しいのだろうか。ホームレスが道端に座っていても、無視されるように、彼女の体は無視されている。僕もその場を足早に立ち去った。

渋谷駅前のスクランブル交差点。歩行者用信号が青に変わる。みんな一斉に歩き出す。いつもなら誰もぶつからないが、全員、横断歩道の向こう側から歩いてくる人とぶつかった。横断歩道上でけんかや、抱擁が始まった。僕も老婆と衝突した。道路に倒れた後、彼女の体を抱きしめ続けた。

僕の体は温かい襖に包まれている。襖が何度も僕の体を愛撫する。僕はいつまでもこのコクーンの中にいたい。けれど、襖が僕を押し出す。僕が拒んでも、僕の体は襖の外に追いやられる。血に濡れて、僕は外に出た。襖の外には、別の襖があった。世界には、幾重にも重なる襖しかなかった。

通勤途中の電話ボックスに、いつもコートを着た女性がいる。毎日、朝も夜も、同じ女性が公衆電話を使っている。休日通った時も、彼女がボックスの中にいた。よく見ると、彼女は受話器に話しながら、電話機のプッシュボタンを押し続けていた。7時間待っても、代わってくれなかった。

近所の100円ショップに行ったら、棚に100円玉しかおいていなかった。商品は一つもない。店内の棚全てに100円玉がディスプレイされている。商品はレジカウンターの奥に積み重なっていた。客は100円玉を棚から取ると、レジの商品山に持参のがらくたを足していった。

アイスを買いにコンビニに行ったら、冷凍庫の中に裸の少女が入っていた。少女は目を閉じている。少女の体は、白い乳液に浸かっている。コンビニの冷凍庫の中で、牛乳風呂でもしているのだろうか？ 少女の寝顔を眺めるうち、少女の全身が乳液の中に沈んでいった。

百貨店のショーディスプレイにいるマネキンが、私を見つめている。彼女は人形ではない。白人の女性だった。流行の服を着た白人女性モデルが、ガラスの壁を叩きながら、私を見つめる。私以外の歩行者たちは、マネキンが訴えかけていることに気づいていない。マネキンは泣いている。

宝石店に入った。ショーケースの宝石があるべき場所には、眼球が置かれていた。眼球は剥製でなく、生きて、動いていた。僕が眼球をのぞくと、目玉が僕の瞳を見つめ返してくる。「いかがですか？ 結婚指輪にぴったりだと思いますよ」笑顔で話しかけてきた店員の顔に、目はなかった。

知人の結婚式に参加した。タキシードを着た新郎は骸骨だった。純白のウェディングドレスを着た新婦はゾンビだった。ホテル内の教会にパイプオルガンが鳴り響く。参列者が拍手で骸骨とゾンビを迎え入れる。神父の前にたどり着く前に、新郎のしゃれこうべは外れ、新婦の顔は溶解した。

レンタカーに乗ったら、助手席と後部座席に赤ん坊がたくさん乗っていた。人間だけではない、子牛、ひよこ、子豚も座席に座っている。人間の赤ちゃんと一緒に泣き叫んでいる。人間の赤ちゃんがひよこを口にくわえた。「食べたら駄目だよ」僕はアクセルを踏みながらひよこの命を助けた。

妻と一緒に娘の小学校の卒業式に出席した。卒業生は、全員頭がなかった。五年生までの子どもたちに頭はあるが、卒業生は頭がない。ステージに立つ校長先生は、血のついた包丁を持っていた。卒業生の首から上は空気なのに、誰も不思議がらない。これは僕だけが見ている錯覚だろうか。

北朝鮮の人民代表者会議に世界No.1と噂のSMの女王様が出席した。キム・ジョンイルの演説後、拍手が起こったら、女王様が机を鞭で叩いた。「おだまり！」女王様が壇上に登り、ジョンイル、ジョンウン親子を鞭で叩き始める。幹部達が啞然とする中、権力者二人は歓喜の声を上げた。

厳戒態勢の尖閣諸島にSMの女王様が降り立った。女王様が、持参のダイナマイトにローソクで火をつける。大爆発が起きた。爆風の中から、鞭を持った女王様の姿が浮かび上がる。「世界中の国が、私のSM王国よ！」領土問題に揺れた尖閣諸島は女王様によって爆破され、地図から消えた。

牛丼屋に行ったら、店員さんがみんな牛さんでした。牛丼一杯290円のセール中ですが、店員さんはみんな泣きながら牛丼を作っています。お母さん牛は乳から牛乳（母乳）を出しながら、泣く泣くカルビを焼いていました。僕はいたたまれなくなって、牛丼を食べず外に出ました。

労働者より、牛の乳の方が搾取されている。毎日毎日、トラックに積まれてコンビニへ。

あれが欲しいな、こうなりたいなと、心の中で憧れているだけでは、希望の地点に到達できない。心の中にある情報思念体を外に放出することだ。行為することによってのみ、希望の地点に到達できる。欲するものを手中におさめるためには、行動していくのみ。手にできると、確信しながら。

自負心は、自分に負けた時、手にすることができる。自分に勝っているには、自負することができない。まず自分に負ける。自分に負けきって初めて、自負できる。自分に勝っている人の自負心なんて、虚栄心にすぎない。

とある仮説の禁書目録・発禁書13より抜粋「好きなことを仕事にしようとしても、たいてい仕事にできない。好きなことを仕事にしようとしている人は、自分でできることしかやらないからだ。自分のできないこと、いや誰もできないことを仕事にできた人こそが、成功するのだ」

人間は、今、接している短い瞬間瞬間にしか生きていないけれど、百年千年という長期間にわたることを、頭の中で考えることができる。考える分には、何でも自由だ。狭い部屋の中で、千年先の未来まで考えることができる。

考えている時の自分は、肉体と経済の束縛から解き放たれている。思考がどんなに普段の自分の生活習慣に束縛されているとしても、生きているこの世界から、思考する自分は逃走することができる。

とある仮説の禁書目録・発禁書16より抜粋「ルーティンワーク、誰でもできるマニュアル化された仕事をするのもよいが、誰にもできない仕事をできる人が、常識を変えていく。自分にはできないこと、人間にはできないことを知っている人こそ、知者である。できないことを見つけろ」

とある仮説の禁書目録・遺書20より「肩が痛い、頭が痛いと苦しんでいる間にも、別の人は何らかの新しい成果を生み出している。もちろんあなたと同じように苦しんでいる人や、娯楽にふけている人もいるが、その間生産している人がいることを忘れないで欲しい。時間と選択は有限だ」

赤信号で停まって、イラつく人は、時間的余裕のない人だ。時間がないと言う人は、時間を大切に扱っていない。時間がないと言う人は、自分もない。自分を大切に扱っていないと、赤信号を待つ時間も惜しくなる。

赤信号は何故あるのか。交通の安全を確保するためだ。僕が赤信号の前で立ち止まっている間、僕と交差する道にいる人が進んでいく。僕が進んでいく間、僕と交差する道にいる人は立ち止まる。赤信号のおかげで、トラブルが起きない。赤信号にイラつく人は、この事実を忘れる。

日本滅亡後見つかった遺跡に書かれていた言葉。「何か買いたいと思った時は、一時の衝動に身を任せて買うのではなく、一日待ってみること。翌日になっても買いたければ、買ってもよい。今の日本人が買っている商品のほとんどは、贅沢品だ」

自由を得るためには、消費を控えること。人にサービスを提供して生み出した利益以上に消費しないこと。必要なものはごくわずか、贅沢品が家計を圧迫している。

日曜日の夕方4時過ぎ、テレビもつけずに一人部屋で過ごすと、孤独が増す。テレビをつければ、たちまち喧騒が部屋にやってくる。寂しさもなくなる。核家族化、無縁社会化とテレビは共生関係にある。テレビがなければ人を求める。テレビと隣人、どちらを選択しますか？

自分に能力があると思っているのは、あなただけかもしれない。
外の世界に力能を発揮して、能力があることを証明しないと、あ
なたが地球で生きていることさえ、誰も認知しないだろう。生き
ていることをわかってもらうためには、力を出し惜しみするな。
毎日破り続けろ、自分という膜を。

「テレビを毎日見ているけれど、ほとんどの番組は、流し見するくらいでちょうどよく、本当は見る必要のないものばかりと気づいたんです」「何故テレビを見るのか？放送が1回だから、見なきゃいけないと思わされるのかもね」「全番組動画配信にしてくれたら、私の時間は回復するはず」

「社会に対する文句ばかり言って、自分を変えようとしなない」とか自己責任論が流行っている。自己責任で自分の人生設計だけ変えるより、社会構造の責任だとして、社会を変革していく方が、難しいし、楽しいはず。ありがた迷惑な変革に終わるかもしれないけど、自分だけ助かるのは嫌だ。

生物の多様性を守るというなら、人間の多様性も守っていくべき。文化の多様性、人生の多様性、趣味の多様性、性癖の多様性、情報と選択の多様性を守っていくべき。人間も生物である。人間が最も凶悪で、暴力的で、最大派閥の生物なのだから、できる限り優しく、寛容的に生きよう。

生物多様性を守るという名古屋議定書が採択された一方、神戸の車の中からは、血まみれの少年が見つかった。名古屋と神戸は、地球全体から見れば、すぐ近所だ。アジアの覇権を狙う中国は日本との首脳会談を断ったし、僕たち人間が、生物多様性を守れるようになる未来は、まだまだ遠い。

小学六年生の児童がまた自殺。本当そのうち幼稚園児とか自殺しそう。臭い、くるな、あっちいけなど、いじめの常套句。そんなに臭くなくても、いじめのターゲットとして選抜されると、みんなに臭いと言われる。いじめ自殺に追い込んだ学生たちは、死刑にも無期懲役にもならない。

台湾の30歳の女性が、自分一人で結婚するという。結婚相手が自分。新しい。自己愛の完成形態。ラブプラスのキャラと結婚した人もいるけれど、これからそういう結婚の新しい形態が増殖するだろう。異性愛だけが結婚として認められるのは、選択肢が少な過ぎ。ネット時代にそぐわない。

NHKのニュースキャスターが赤い羽根をつけている。募金を呼びかけているんだろうし、羽根は実際の鳥からもぎ取られたわけでもないんだろうけど、羽根と鳥は大切に。赤い羽根も、そろそろ動物虐待的と指摘されそう。

とある仮説の禁書目録12冊目より抜粋「覚せい剤を使っている人は、お酒や煙草ではトリップできないのだろうか。というか、別に酒や煙草などの嗜好品を使わなくても、トリップできるのに、何故物質に頼るんだらう。物質は虚ろである。トリップしていると思えばトリップできるのに」

過去書かれた小説は、当時意義のある作品だったかもしれないが、今ではもう歴史上の古典でしかない。今の小説は、同時代の諸現象の空気の中からしか生まれてこない。過去の小説から学ぶべきことも多いが、一番学ぶべきは、同時代に苦しんでいる生き物たちの叫びである。

自分が過去に書いた小説の中で、一番面白い小説を書いたとしても、たいした話題にはならない。自分が過去読んだあらゆる小説の中で、一番面白い小説を書けば、話題になる。小説を書く時は、世界中に存在するあらゆる小説の中で、一番面白い小説を書こうと意識することだ。

「どんな遊びをしている時よりも、小説を書いている時が、一番楽しいと、そう言える人に私はなりたい」「どんな仕事をするよりも、小説を書くことが、一番人のためになると、そう言われる人に私はなりたい」

1日原稿用紙3ページずつ書けば、16日で短編小説の第一草稿ができるし、1ヶ月で新人賞応募原稿の第一草稿ができる。どんなに生活費を稼ぐための仕事が忙しくても、毎日継続すれば小説はできる。ツイッター小説はもっと簡単にできる。毎日つぶやけばいい。誰でも創作可能だ。

書くべきか書かざるべきか迷ったら、書いてしまおう。自分一人の心の中で躊躇してしまうような問題は、公開して、みんなで議論できるように書くべきだ。マスコミの時代なら、書くことを躊躇するような問題は抑圧されてきた。ソーシャル・コミュニケーションの時代では、みんな開ける。

ツイッター小説を書くのは気楽だけれど、普通の小説を書くのは相変わらず気が重い。普通の小説は、書くのも読むのも気力がある。エンタメの小説でも、気力と時間が必要だ。ツイッターはストレスを軽減し、心地よさを増す。文化の衰退という人もいるが、僕はツイッターを歓迎する。

小説の一場面を書けなくなったら、同じ場面をまずツイッター小説で書いてみる。140文字のまとまりができる。詰まっていたものもきれいに流れてくれる。できあがったツイッター小説を、小説の中に戻す。そこから文章を膨らませる。こうすれば、ツイッターと遊びながら小説ができる。

ネットで注文した40インチのテレビが届いた。ゲームをすると大迫力。今までは26インチだった。全く別のゲームをしたような気分になった。こんな魅力的な技術があったら、小説が読まれなくなるのも当然だと思えてきた。けれど大丈夫、小説の神様は友達、裏切らないし負けないんだ。

どんなに刺激的で魅力的な技術革新があっても、時代を切り刻む小説は、それらの技術が与える喜びを凌駕するはずだ。斬新な小説は、新しいメディアを切り裂く。3Dにだって、小説の神様は勝てる。大丈夫、小説は友達。何もなくても人間の脳というプログラムさえあれば、小説はできる。